

庭の方位

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. はじめに

昨年に続き、新たに日本庭園 5ヶ所を視察した。訪れた場所は、木幡家住宅(松江市・宍道町 八雲本陣記念館)、萬寿寺(松江市・奥谷町 臨済宗妙心寺派)、佐草氏庭園(松江市・佐草町 八重垣神社宮司宅)、清水寺・蓮乗院および古門堂(安来市・清水町 天台宗)、雲樹寺(安来市・清井町 臨済宗妙心寺派)である。

建物の南に庭園を配している事例は無く、やはり、南～南西に庭園を設けるのは民家(農家)に特徴的な傾向のようだ。昨年のレポートでは民家(農家)の屋敷構えについて述べたので、今回は寺社建築について考えてみたい。

2. 伽藍配置について

仏教は朝鮮半島を経由して6世紀前半には日本に入ってきたと考えられるが、建築様式についても大陸で成立した伽藍配置とともに日本に入ってきている。方位を重視する道教の影響を受けたとも考えられるが、南北方向に基本軸をとり、南大門・塔・金堂を一直線に並べる伽藍配置である。

わが国では四天王寺の伽藍配置が代表的事例となる。その後、塔と金堂を並置する法隆寺、東塔と西塔を並置する薬師寺など伽藍配置の変遷はあるが、南大門・中門と金堂・講堂を南北軸にそって配置する基本形は変わらなかった。平安時代に伝わった密教の山岳伽藍は、その地形的制約から一定の伽藍配置を持たなかったようだが、鎌倉時代には宋の影響を受け、山門・仏殿・法堂が一直線に並ぶ禅宗式伽藍配置がもたらされている。

このため、一般的な寺院では金堂・講堂・仏殿といった建物の南側は大きく開かれ、座敷・書院などの接客空間は北側に確保されることとなる。庭園は座敷・書院からの視線を重視して構成されるため、建物の北側が多くなると考えられる。



図-1. 雲樹寺山門 奥に仏殿が見える

5万坪の敷地を有する雲樹寺は禅宗式伽藍配置であり、山門・仏殿・方丈が南北軸にそって一直線に並ぶ。方丈の裏には枯山水の庭園がつくられ数百株のつつじが植えられている。庭園の方位は、方丈の北西から北となる。

敷地規模は異なるが萬寿寺も禅宗式伽藍配置を踏襲しており、本堂の北側に庭園が造られている。この寺に特徴的なのは茶室の存在である。庭園の西側に茶室が東側に外腰掛があり、本堂北側の庭園は露地庭も兼ねるようで飛び石が配されている。限られたときしか一般公開しない茶室のようだが、2畳程度の水屋の天井をわずか2枚の板で張るなど、さりげなく贅を凝らした空間が楽しめる。



図-2. 萬寿寺・庭園 茶室から外待合を見る



図-3. 萬寿寺・茶室 水屋の天井

3．社殿建築について

本来、神社には社殿などなく、神が住むと考えられた山や降臨すると考えられた磐座などを神聖視していたはずである。いまでも拝殿はあるが社殿をもたない神社はあり、古式の様式を伝えるものと考えられている。三輪山をご神体とする三輪神社・奈良県が全国的にも有名だが、島根県では出雲国風土記にも登場する飯石神社がこのタイプである。ご神体に向かって拝殿を設ける場合、拝殿が特定の方角を向くことはない。

社殿そのものは仏教建築の影響(対抗措置)によって成立していったと考えられ、仏教建築との違いを際立たせるために、方形・寄棟形式の屋根、瓦葺き、土壁などを使わない。しかし、建物の配置は仏教建築と類似しており、社殿を南面させているケースが比較的多い。

神社の庭園については視察事例がないが、全国的には有名な庭園もあるようなので、今後の検討課題としたい。



図-4. 飯石神社 ご神体の磐石と拝殿（社殿はない）

4．八雲本陣

旧山陰道に面し宍道町の中心部にある八雲本陣(木幡家住宅)は、1733(享保)年に建てられ国の重要文化財となっている。松江藩主の領内視察や出雲大社参拝のおり本陣宿として利用され、現在も御成門が残る。近年まで旅館として一般にも開放されており、川端康成や松本清張らも訪れたことがあるという。敷地 1200 坪、建坪 800 坪といわれ、敷地北側の庭園を取り囲むように、かつての宿泊室や大広間が配置されている。

研究部会のテーマは庭園だが、この八雲本陣については庭園だけに着目するより建物全体について考えてみたくなる。旅館として使われていただけあって多くの宿泊室 座敷があるわけだが、座敷が

ら見える庭の造り、床の間の造作、家具・調度品の数々に趣向が凝らされており、しかも部屋ごとに細やかな造作の違いが見られる。現在も一般公開されているが、かつてのように宿泊や食事を楽しむわけではない。空間のポテンシャルも大変高く、現存する本陣宿として Wikipedia に紹介されているのは全国でも 20 ヶ所程度しかない。今後、利活用の方策を考えてみたい。



図-5. 八雲本陣の庭



図-6. 八雲本陣 床の間の造作